のゐし。そん爾まことに力ありてうぶごとばをまもりて
げ名をまことざれべるり夫みづうユダヤ人といひて實に
あらのうば唯いつちりをいよ サタンの會れなる者として我
ことばを爾のうちよりきたらしめんぢれ足のまくよふき
しめ我るんぢを愛せしことをあらしめんナるんぢうぶ
忍耐のことばをまもりしよりて我もまた爾をまもりて地
よまむ人をこころみんがためよ全世界よきたらんとする
試のときよこれをまぬうるあむべし十一うる迅速よきたら
ん爾がもつところのそれを堅くたもちて爾のうんむを人
ようばるることのなき十二勝をうる者をば神の殿れ

うちの柱とるきん此よりふたたび出ることるし我また
うぶ神の名とうぶこのみの京城まるんち天よりうぶ神のと
とよりくだる新きエルサレムの名あらびうぶあたらしき
名をこれきよ十三耳あるうるれへ靈の諸教會よいふ
ところをきくべし 十四 るんぢラヲデキアのけうくるひの
使者よこのきたくるべしアーメンなるそれ忠信なる眞實の
證者このみの造化のそもとめるそれ斯ごとくいふと十五曰
うぶるんぢが冷うるもなうらば熱もなうざることを爾のう
ざるようてあれ我るんぢが冷うるうるうる或へあつうんう
ことをねがふ十六爾まことぞよ溫然しそひやうるもあらばな

つくもあくまで此ゆゑに我をんぢをまぐ口よりきいださんとせ十七爾みづからまこと富のつ豐よりよりえきところるしとしひて實いるやめろとの憐むべきもれ又まづ〳〵瞽目はだらるるをまらぎまぐ十八我をんぢよまく〳〵む爾ゆみを
るきんなめよ我より火よやきたる金をこのく又むのがはぐこれ恥のあらはまざらんなめよ白ころもを買てまこと〳〵又みることを得んなめよ目藥をこひて目よゆまま十九よりて
我なんたる者いつまこことをいまし〳〵めこまんと懲これゆゑに爾をげみくくなのらなめよ二十視よつまま戶のそこなたちて叩らまぐ聲をきて戶をひらくものなくぐ我それ

人のまことよいれらん而〳〵てつまいそれ人とまこととよ其ひと
い我とまことよ食せん二勝をとるめれまん我さきよ勝をえ
て我ちとまことよ其くらあよ坐せるがごとく我とまことよ
つぐ實座よざまることをゆるさん二一耳あるめれい靈のお
よけうくらいよいよとろを聽べ〳〵

第四章

このち我みーよ天よ門ひらけなりなる我はじめ
まきけるところのつまよこのたまるラッパのごときこゑ復
つまよ語ていつく此よのぼま我このちわたるべき事を
まんぢよちめさん二我たぐちよ靈よこんぐ天よひとつれ
實座まうけありて其くらみれ上よざまる者あるをみたり

三その坐まるところ〻貌へ金剛石なるき瑪瑙のごとく且そのくゝ
めのまゝりよ緑の玉れごとき虹あり四そのくゝみれ四圍よまれ
二十四のくゝるあり二十四人の長老ちろきころもを著こゝ
よ金の冕をいただきて其くゝるよぎまるを見なり五その中
央のくゝるれらちより閃電いろづち及なまれこゑ出ま
たそれ寶座のまへよ燃るゝつの火燈あり。これ神のゝ
つの靈なり六くゝるれまへよ水晶よ似たるギヤマンの海
のごときものなり寶座の正面とそのまゝりよ四の活物あ
り前後ことごく目あり七第一のいきものへ獅子のごと
第二のいきものれへ牛のごとく第三のいきものれへ面のこのれ
ち人のごとく第四のいきものへ飛鷲のごとし八この四れ
活物おのゝ六のつばさありそれ内外ことごく目あり此を
のよるひる息ぜしていふ聖いかな聖いかな聖いかな昔い
ま〻今いま〻後いまだ主たる全能の神と九これ活物くゝ
よ坐まるところの世々のぎりうゝ生るものよ榮を歸〻
られを尊敬こゝよ感謝せ〻ときに十二十四人のちやうらう
寶座よざまる者のまへよ伏このよ限ゝいけるれを
けい〻自己のこのんありを其くゝみれまへよ投いだ〻いひ
けるへ主よるんぢん榮とたふとびと權威をうくべきを
のゝり爾へばんものを造り萬物へみこゝろよりてた

もち且つくらゐたり

第五章

又くろみを帶びる者る一つの印にて封印せるうつくしきものを又文字ある巻をそれみぎの手にもちるをみたり二つまた又ひとりのつよき天の使おほいなる聲をいだして誰かこの巻をひらき封印をとくにはるやとうまろたふるを見たり三ちからある天にも地にも地の下にも此きりれをひらき又これをみることをうるものなし四一人としてこれ巻をひらき又これを見るに堪る者あきらゆ

ゆ我はなほはるしく哭り五この長老のひとり我にいひけるは哭なのまユダの支派ライオンなる獅子ダビデの根をて勝をえたれば此きれを開きたこのなゝつの封印をとくことをうるなり六又寶座および四のいきものゝ間ちやうらうたちにあひだに羔たちをるを見たり此こひつゝ前にころされしごとくなるがごとし。これにゝなゝつの角となゝつの目あり。これ目は全世界につかはされし神のなゝつの靈なり七この羔きたりみて寶座にぎりたるものより右の手にうまきものをとりたり八巻をとりたる時四の活物および二十四人の長老あのく琴をとり又こうをもつたる金の香鑪をもつて羔のまへにひれふしたり此こうは聖徒たちの祈禱なり九これ長老たちあたらしき歌をうたひいひける

い爾いてれ巻をとりてれ封印をやぶるに堪たる者あり。
そ八爾ふつて殺さまそれ血をもて諸族諸音諸民諸國の
うちより我儕をあがなひ神に歸せしめ十且てもとりの神
のためにてもとりを王とし祭司となしたまへるなり。
きろ地に王たるべし十一てもとり又みしるに寶座と活物および
長老たちのまなかりに衆のてんれ使の聲あるをきけり其この
ち千々萬々十二られら大聲にいひけるさきに殺されたる
おひつじは權威富智慧能力尊敬榮光讚美をうくべき者
なり十三てもとりまた天および地および地の下および海の上に
なるところの凡てつくりたるものまた又そのなかに あるを
の皆いふるをきけり曰わがつくりし讚美尊敬榮光權力くら
みに坐するものと羔とにきして世々のぎりなるかんこうを
十四是によりて四の活物アーメンといひ二十四人の長老
ふして拜せり

第六章

羔その一の封印をひらきしとき我みしに活物のひ
とつ雷のごとき聲にてきたれといふをきけり二また見しに
一匹の白馬をみたり。これに乘るものの弓をたづさふ且てん
むりを與へられたり彼つねに勝りまた勝をえんとて出ゆけ
り○三また第二のふういんを開しとき我だいにまた生物のき
たるといひけるをきけり四又ほかの赤馬いできたり之

よのまろうを地の平和をうばひ且ひとぐをして彼此よあひ殺しむる權をなたくらまろう彼また巨なる刀をさづけらる○五また第三の封印をひらきし時だいさんの活物のきたるまと言をきけり我みしに一ぴきの黒馬をみたり。こよ乘るその手に權衡をもてり六我この四の生物のなかよ聲あるをきけり曰ぎん十五錢に小麥五合ぎん十五錢に大麥一升五合なり油と葡萄酒をそこなふ勿れ○七また第四のふいんをひらきしとき第四のいきものい來といふをきけり八ろを見しに一匹のなわざめたる馬をみたり。これに乘るものの名へ死といふ陰府その後にしたがへり。その

まろう力劍饑饉死亡および地の猛獸をもて世の人此ちろんの一をころすの權をあたへらるたり○九また第五のふいんをひらきしとき祭壇のもとよ曾て神の道此ちりたよび其たてし證のためにころさるたる魂たちを見たり十この人ろう大聲によりていひけるへ聖まことの主よいつまで地に住む者どもをさばかせず且こたへられの血此ちりくいをうしなはんぎるや十一爰に各のくに白ころもをなたくこたまいひたまひけるへ彼儕のごとくこうさまんとまろる其ともに殺たらける兄弟たちの數のみつるまぐ安んじて待べし○十二又だいろくに封

印をひらきしとき我みしに大なる地震あり日は毛布のごとく黒くなり月は血のごとくなりぬ又天の星はいちぢくの樹の大風にゆられていまだ熟せざるそれ果のおちるがごとく地はおち天はまきものの如くまくりゆき諸山も島も皆その所をうつりぬ地の諸王また貴人とまづしき人と将軍勇士また奴隷とまづしきの自主こと洞にまた山のいはほに匿れ又山のいはほに向ひて願はくは我らの上に墜ちてわれらを宝座にざせるものの面とこひつじの怒をさけしめよ主の羊のいかりの大なる日まさにいたりぬるなり誰かこれに抵らんや

第七章

これ後ちわれ四人の天使の地の四隅にたちて地の四方に風をひきとめ地のうへにも海のうへにも樹のうへにも風をふかせざるを見たり二また此はるに一人の天使いでゝ神の印をもちて東より登きたるを見たり。これ使この地と海とをそこなふことをゆるされたる四人の使に向ひて大聲によばゝりて三ありて神のたまへる額に印をまゝが印をまづ地をも海をも樹をもそこなふなかれといへり四われ印せられたるものの數をきゝしに イスラエルのもろ〳〵の支派のうち印せられたるものあり

十四万四千あり 五 ユダのやからにて一万二千ルベンのや
からにて一万二千ガドのやからにて一万二千 六 アセルのやか
らにて一万二千ナフタリ此支派にていちまんにせんマナセ
の支派にて一万二千 七 シメオンのやからにて一万二千レビ
のやからにて一万二千イサカル此やからにて一万二千ゼ
ブルンのやからにて一万二千ヨセフ此やからにて一万二
千ベニヤミンのやからにて一万二千人あり○ 九 此のち我
みしに諸國諸族諸民諸音のうちより誰もかぞへつくす
こと能はざるおほくの人しろきころもをき手に棕
櫚の葉をもち寶位と羔のまへにきたりてたてり 十 一のまへ
大聲によばはりいひけるは救はくらゐに座せるつかさの
神と羔よりいづるなり 十一 天のつかひみな寶座および長老
たちと四の活物とのまはりにたちて寶座にむかひ府伏し
て神をはいし 十二 いひけるはアーメンねがはくは讃美えい
くわう智慧かんしや尊敬けんゐ能力よゝ窮なくわれらの
神に歸せよアーメン 十三 ちやうらうの一人こたへていひける
は此しろき衣をきたる者はたれぞ且いづくよりきたりし
や 十四 我こたへけるは君よなんぢこれを知べし彼われにい
ひけるはこれらは大なる艱難をへてきたりし者にて曾てこひつ
じの血にてそれころもを滌これを白くせる者なり 十五 これ

故に このもろ〻の神のくらゐのまへに あり且 このみの殿にて、よ
るひる神に つとへ寶座に ぎもする者は このもろの ゐうに居た
まふ 屋し 十六 このもろ〻は このさわに飢ぜ このさわに渴ぜまた 日
も熱氣も このもろを害はざる ゐうり 十七 そは寶座のまへにある
羔 このもろを やしなひこのもろを活る水のみるもとに導き
また 神 このもろの 涙をそれ目より ぬぐひたまふべけ
ゐう

第八章 また 第七の封印をひらきしとき 天 ほぼ ゐうりこ
とおよそ半時 ニ そを 神のまへに なをる七人の天 に つのひ
をみる 彼儕 ゐう つに ラッパを なをゐうらきたり 三 又 ひとり

の天に つとひ 金の香鑪をもちきたりて 祭壇の この たちに
たち 彼 おほくの香をあたへらきたり 此 くらゐ おほまへに
なる 金の祭壇に うへに こをを 獻てまづ くの聖徒のいれ
に そへ めん爲 ゐり 四 このの烟せいとに いのりに そひく
天のつとひに 手より 神に まへに のぼり 五 ゐう 天の使 このうろ
を 執こをに 祭壇の火をとりて 地に このたむけに まづ 多のこ
ゐ 迅雷と閃電 および 地震 おこる 〇 六 ゐう つのラッパを
もつる 七人に 天のつとひ ラッパを ふく 備をるせり 七 第一
に てんの使 ラッパを吹 ける まづ 血のまじりなる 雹と火と 地
に ふりくだり 地のさんぶんに 一 やけうせ また 樹のさんぶ

んれ一やけうせまべくの青草もやけうせたり○八だいの
の天の使ラッパをふきけるとき火とやくる大なる山のごと
きもれ海へなげいれられうみの三分のいち血となりたる
九海のうちにある造られたる活物さんぶんの一もまた舟さ
んぶんのいち破壊なり○十第三れてんの使ラッパをふき
けるとき一のおわいある星なりし火のごとくにもえて天よ
り隕るるもち河の三分の一わりびと水のみなもとにおちた
十一れ星の名ハ茵蔯といふ水れさんぶんのいちハ茵蔯の
ごとくになりぐくあれり斯みづれにがく變るによりて多くの
人ちねり十二第四の天れてうひラッパを吹けるとき日れさん
ぶんれいち月の三分れいち星の三分の一ふみうたるとそ
の三分れ一まべてくらくなり晝さんぶんの一ひのうるく
夜もまた光なし十三見しまに一の鷲そられ中央をとび大
なる聲もてくよぶをきく曰のちまた三人れてんの使ラッパ
をふこのんとまるまに地にまむ者ハうぎなひるるなる禍る
る一のる禍なる哉

第九章 第五の天使ラッパをふきけるとき我てんより地にれ
一ちなる一のほしを見たり此ほしそこなるき坑のこのぎを與
らまたり二この底なき坑をひらきけるとき おわいある爐の
けむりのごとき煙あるよりのぎり日と穹蒼とこれ坑れ

けぶりのなかより暗くなりぬ 三 おびただしくの蝗けぶりのごとく
地に いづ此いなごは地の蠍はちのごとき權をあたへら
る 四 また地の草もろもろの青緑なるものもしくは樹とそこなふこと
なく唯ひたひに神の印なきひとびとを傷ふべしと命ぜられぬ
なり 五 且これらの人をころすことを許さずただ五ヶ月はあ
ひだこれらを苦むることをゆるされぬ其くるしみは人さ
そりのさそりなるときの苦しみのごとし 六 この時にはひとびと
死をもとめんとすれども能はず死んことをねがへども死
いのがれさるべし 七 此いなごの狀いくさに爲にそなへ
たる馬のごとし頭には金の冕のごときものあり其

このほかは人の面はごとくにして 八 女のごとき髪
あり その歯は獅子の歯のごとし 九 また鉄のよろひあるごと
き胸當あり その翼のおとはいくさに馳せ走る車の多くの馬はしりさ車をひ
きて戰場に馳せるがごとし 十 且さそりの尾はごとく
き尾と蠆とあり 此いなごは五ヶ月のあひだ人をそこなふ權
をもてり 十一 此いなごは王あり底なきところの使者なり ヘブル
の音にてその名をアバドンとしひギリシヤの音にてアポリオン
といふ 十二 一のわざはすでに過ぎたり二のわざはなほ
なんとす 十三 第六の天使ラッパをふきし時 神のまへ
なる金はたちのうへなる角のうちより聲ありて 十四 ラ

ツパをもちる第六のてんに使ゑこのかぞをきく曰このれつるぐ
また大河ユフラテのほとりゑある四人のつのひとゆる世
十五 乃ゑかりの使者ゆるきたり年月日時ゑしかりて人の
さんうんの一をころさんたらゑこうまを備しとれるり 其騎
兵のこの二万万あり我その数をきけり 十七 我まぼろしゑこ
れ馬とられゑ乗るのものをみしぐそれ形狀うくれごとく。
このかしらに火色むらさきいろ硫磺色のむれあそを著むきの
こうしらに獅子の首れごとく其口よりハ火とけぶりと硫磺
いろ 十八 この馬れ口よりいづる火と煙といぶりと三のこれ
らなめゑ人のさんぶんの一ころさきたり 十九 この馬れちろ
らに口と尾ゑあり その尾ハ蛇のごとくゑして首あり。こ
れをもて人をそこなふあり 二十 これ禍まくころさきざる餘
のひとびとハ尚それ手をもてころをくいあらためず惡鬼
をはしら見こと聞こと行こをえざる金ぎん銅い石木
の偶像をはしら 二十一 又それ兇殺魔術姦淫盗竊をくいあらた
めず

第十章

二 又ひとりの強てんれ使の雲をきて天よりくだ
るを見たり虹その首ゑあり。それ面ハ日のごとく其あしハ
火れはしらのごとし 二 それ手ゑひらきたる小き巻を
もち其ちぎの足を海のうへゑふみ左のあしを地ゑふみ

三 獅子のほゆるごとく大聲をもて呼はるときに
いつのいかづちありて聲をいだせり四つの雷らを
發せしときに我これをかきたるさんとせしに天よりいづ
る聲ありて此なにつれ雷のいへるところを爾らまを封じて
かきしるすなかれといへるを聞り五つぎ見ところに
海と地とまたがりて立てるんの使みぎの手をあげて天に向
うひ六世々永遠にいける者にして天およびそれなかるものを
此地およびそれなかるその海およびそれなかるその物をつくりた
る者をさして誓いひけるんそれ時をのべざるべ
七第七のんの使ぬこるをいだすとき即ラッパをふくと

きにいたりて神のかくれたりしなる預言者たちに示たまひし
ごとく其なくなり成就まべし八つぎ聞しところの天よりい
でし聲また我にいひけるん行てこの海と地とまたがり
たる天のつよのひの手にもつところの展なるちひさき巻
をとれ九我それ天の使のもとにゆきて之にいひけるん請
ちひさき巻をたまへよ彼いひけるん此をとりて食つくせ爾のはらは苦くなるべし
とりて食つくせ爾のはらは苦くなるべし口にはいかに
とりきん蜜のごとくなるべしかれ天のつよのひの手より
小き巻をとりてこれをくらひしに口にはきいかに
甜ごとみつの如くなるべしかれとりくらひつくしてこれ腹にはなは

くるまなり 十一 彼これまいひけるに爾ふたゝび諸民諸國諸
音諸王のことを預言すべし

第十一章

ことば杖のごとき葦をあたへらるゝ天の使これ
まいひけるに起て神のみやと香壇をはかりまことを拜せ
る者とはかの殿のそとに庭いのこして度るなかれ。
そこにことを異邦人にあたへたまひしとまことなり。このまち四十
二ヶ月のあひだ聖城をふみあらさん 三 ゆゑに我ふたりの證
者に能をあたへん。このまち麻のころもを着て千二百六十
日のあひだ預言すべし 四 このまちに地をつゝきどる主はま
ことなる二の橄欖の樹ふたつは燈臺なり 五 のしるまち

を害うんとまるるものあらばかならず火それ口よりいでゝそれ敵を
はらふなり若このまちをそこなうんとまる者はかならずそのも
のへ斯のごとくころさるべし 六 彼儕よゆゑんまるあひだ
天をとぢて雨をふらざらしむるの權をもちて亦みづを血
に變をなして地をうつ權をもつ七 このまちをすべてのの災
をもちうんとき底なき坑よりのぼる獸ありてこれとなんこのひ
とをころし勝てこれをころさんとす八 その屍はおほきなる邑にち
まちにあり此まちを譬てソドムとなづけ亦エヂプトと名く
まちなる主の十字架にかけらるゝところなり九

諸民諸族諸音諸國のそれ三日半のあひだこの屍の
なれを見このつそれ屍をはうむる葬ることをゆるさず十地
まむ者どもこのもろもろの死しはまりてまろこび樂たがひに礼
物をやりとることをせん。そこにそれ三人のまげんぎや地にまむを
のを苦しめたまべり十三日半にいたり生のまこと神まりい
でこのもろもろのうちに入りこのもろもろおきくそれ足をたてしろ
でこれを見るものの大におそれまたる十三日天よりおりいるる
聲ありて此にのぼりまとこのれらに言をきけり。このもろ雲にの
りて天にのぼりまり。それ敵これをまを見たる十三られ時にわれほ
ある地震ありて邑の十分の一にたおれ此ちしんのなかに

死しまれ七千人のこりまるものどもいと大におそれ榮をてん
の神に歸せり十四だい二の禍はぎさまり第三のちぎりもひ速
うにきたりんそまを。十五第七のてんれ使テッパを吹しまき
天においいるる聲ありて曰これ世のもろもろの國にもろもろ
の主およびまのキリストのものとなまりキリスト世々に
ぎりをこまを管理なまりん十六神のまへにおりて座位に
ぎりまたる二十四人の長老ひまふしてて神をはいしい
ひけりん今いまし昔いまを全能の主なる神にもろもろ感
謝をまんぢ既にわれほんるる權をとりて政をはじめたま
まへにまる十八もろもろの國は民らをいだりり爾れい

このも亦いかなる且たゝしそれを審判しるんぢ此ちも
べるる預言者および聖徒ゐるびこ太とふとの別ゐくそれ
名とおそるゝそれを賞をなたく地をほろぶまそのをは
るばしたまふ時まぐるいたる十九ときに神のみや天に
ひらけ殿のうちに神此やくそくの櫃みゆ又いるづまと
聲と雷および地震とおそるいるる雹となりき

第十二章 爰におそるいるる異象てんにあらるる一人のをんな
あり日を著つきをあしの下にふまえ首に十二の星のゐ
んかりをいただけり二彼まぐるに懷孕をりしゞ子をうまん
として甚くるみあきさけべり三また一此ちるし天にあ
らるる一條のおそるいるる赤龍ありこれに七のかしらと十
の角あり。それ七つの首に七つの此冕をいただけり四その
此尾まそ天の星の三分の一をひきこまを地におとせり此
たる子をうまんとまる婦のまへにたちまち産をまちてその子
をくらうそんとまを五をんなる男子をうめり。その子てつの杖を
もて万國の民をつるさどるべきをとを。この子神とそれ寶座のを
とにひきあげられたり六婦のがまそ野にゆけり神そこにそこの
まを千二百六十日の間やしるそしめんなめに備たまへ
る一の所あり七ゐくて天にいくさおこれりミカヘルそれ
使者をひきゐくく龍とたゝかふ龍もまたそれ使者をひき

あくまことなどゑーゆハ勝らとあたそべ且ふたゝび天
よをることを元にゝこゝよ於てこれ大なる龍まるれち惡
魔とよばれサタンとよびるゝこれ全世界の人をまどハを
老蛇ちよおひあろさる其つゝひもまた共よおひおろされ
たり十天よおゐいなる聲あるをきけり曰ゝまゝこれ神のを
くひと能力とそれ國と神のキリストれけんる今まぐよい
たまり。そハゝまゝの神れまへよ夜晝ゝまゝの兄弟をう
つたゝある者まぐよおひあろさまたれゝあり土ゝまゝこれ
兄弟ハこゝひゝの血たよびあのゞ證せ〜ところの道よよ
ゝまゝこゝまゝよ勝り。ゝまゝこれ死よいたるまぐそれ生命ゆを〜
まぐりき十三これゆゑよ天とてんよをるそれいよろこべ地
と海いてぐつひゝるゝゝ。そハ惡魔れのゞ時のいくゝもの
ゝきを知れゐいなる怒をいだきてゝんおらの所よくだを
べゝり○十三龍れのゞまぐよ地よおひれろさまを見く
この男子をうめる婦をゝやませり十四これ婦おほいなる鷲
の二れつたきをあたへらを野よとびくあのゞところよい
たりそゝこゝて蛇をさけ一年と二年と半年のあひだやゝる
い所たり十五蛇それ口より水を河のごとく婦のゝ〜ろよ
吐てこゝをたゞよゝさんとせり十六地をんゝをたまけ口
をひらきて龍のくちよりまきたる水をのみつくせり十七龍

とんをいろうてそれのうち兒女まうち神のい
ましめを守イエスのあうしを有たれとなぐうそんとそゆ
けり

第十三章

そこ海の沙ぬうへにたちて一匹のけものの海より
いでくるをみたり之にまうつの首と十の角のあり その角の
うへに十のこうむりをいただき其口のしるしに僭妄の名を
あるせり 二つぐ見しところの獸それうたちい豹のごと
く其あしい熊の足ぬごとく その口い獅子の口ぬごと
龍かの己れ能とくらゐと大なる權威をこれにあたへたり
三つ己此けものの一のこのしら傷をうけて幾どちるんとも
る狀あるをみたり。それ死んとまるとき生ありし傷いえけ
きぐ全世ぬ人こそをなのやしとちそしたがへり 四 龍それ
けんゐを獸にあたへしを人々たちをはしり 又こ
れけものを拜しいひけるい誰ぞこの獸のごときそのあるう
んや誰ぞこそと戰をまうるのれあるんや 五 これけものの
夸大なるこそと謗讟こそをいふ口をあたへられまた四
十二ヶ月のなのひだたたうきをまうぐき權をあたへらる 六
この己口をひらきて神をけがしそれ名とその聖所および
天にすむものどもをけがせり 七 この己聖徒たちとたゞ一の
ひこうきに勝こそをゆるされ又ちよぞく諸民ちよりん諸國

とつゝきとる權威をあたへられたり八地上にあるものゝ
の人まことの世のそとめより〇こゝろさきだまひ羊のい
のちの冊にその名をしるさざるものゝこれ獸をも
いせんか耳あるものいこゝをきくべし十おほよそ人をと
まこゝにまるものいかの色赤とせるもの刀をそ人をこ
ろをめのゝ已またこのこゝろをもそこゝろさるべし聖徒の忍耐
と信仰こゝにあり〇十二にまゝ一匹のけものゝ地よりい
づるを見たりこゝにまゝ二角つのありて羊の角のごとし且そ
のこゑいふこゝ龍のごとし十二これ獸さきのけものゝまへ
にて前にけものゝ凡のけんをとり地とそれ上にあるも

者をしてさきの死んとまる狀なりし傷はしたるけものの
を拜せしめたり十三又おほひなる奇徴をなし人々のまへに
て火をてんより地にくだし古且それ權をもてそ獸のまへに
おこなふところのしるしをもて地にすむものをそれを欺きこれ
らにこのたりてこれ刀傷をうけそなほ活るけものゝ像をつ
くらしむ十四彼これけものゝ生命をあたへこゝをもて
てこれいふこゝを得せしめ又そのざうを拜せざるものをも
こゝろこゝにこゝろきしむるの權をあたへたり十五ろ
も衆人をして大小貧富自主奴隷のこゝろちをもて或いみぎ
の手あるひは額にしるしをうけしむ十六印誌とまるこれ獸

其名なるぎるその或いそれ名のこのぞあるぎるゆえにつをべて賀易をるこをと得ぎるあり汝り此けりれゝ數目の義をもるものゝ智慧あり才智あるものこれけりの數をこのぞへよ獸のうまゝ人れるぞり其このぞの六百六十六あり

第十四章

我みしるに羔シオンの山よたそり十四万四千の人ゝまとゝりあり皆それ額よこひつゝの名おゝび羔ちゝの名をもるせり二るを天より聲あるをきけり。おゝゝの水ゝ比こゝのごゝゝ大なる雷れこゝ多のごとし我きゝしこれ聲ゝまゝを彈ものゝことをひく琴のおとゝり三彼儕あゝゝしき歌をゝゝみの前および四のいきものと長老たちのまゝ謳これうれゝ贖をるこゝをえて地よりきたるる十四万四千人のほゝゝ學うるこゝとゝゝしゝ四ゝゝゝゝゝ婦女くまゝとつゝそれ身をけがさざる潔もれゝり且こひつゝのゆく所いづくまでもこゝを從ふ。このゝゝゝ人のゝゝのゝりあがるひいがきれゝるゝものまそ神とこひつゝまさゝげゝ初の果ゝり五それ口いつゝりゝゝしこのゝゝゝゝ疵あきゝれゝり

○六又ひゝゝの天の使れゝゝの中央をゝゝをみゝり

この地よゝむ者ゝるゝゝ諸國諸族ゝよゝん諸民よのゝつたへんためよ永遠あるゝゝの福音をなづさへ七天る

るこゝろをいひけるに神をおそれ榮をこゝに歸せよ。そ
神の審判きたれるまふとき既よりわれらの天地海および水
のみなもとをつくりたまひしかをおそれを拜せよ八又ひとりは
矢は使それ後は第二のあらがひゆきていひけるに大あらバビロン
ふたつふたつなりたれかを彼それうんいんよりて干る怒
のさけを萬國のたみまも飲しめたり九第三のてんの使ら
きたれ後よりたかがひゆきて大聲にいひけるに獸とそ
れぞうを拜しそれ印誌をひたひあるひは手にうくるを
のたまふ十このまたは神のいかりは酒をのまん即ち神のい
かりの杯にそれをまじへたるものなり又きよれ

天のつかひたちに及こひつじのまへにて火と硫磺をもてく
るしめらるるを十一それ苦めらるる烟うんよのぶりてつ
る時に獸とそれ像ををいまるる者またそれ名のあるしを
うくるそれは夜晝やすらざるなり十二神はいましめ
イエスを守まる信仰をたもつ聖徒のにんたい茲にあり
十三また天よりこゑありて我にものいふをきけり曰うんち
これは事をかきなさ今よりのち主にありて死ぬる死人はさい
わひなり靈もまたいふ然るにそれ勞苦をやめてやす
まんその功これにしたがへるなり○十四我みしに白くもあり
その雲のうへに人の子のごときその首にきんの冠をいた

ごき手にとき鎌をうちてざせり十五又ひとりの天使つかひ殿よりいで大なるこゑをもて雲のうへに坐したるものにいひけるは刈時きたりぬ地の穀物熟したり爾の鎌をいれてこれを刈へしとて雲のうへにざせる者それをもて地にいれけるに地のことくそこなはれたり又ひとりの天使てんにある殿よりいで彼もまたとき鎌をもてり十八又ひとりの火をつかさどる權威をもてる天のつかひ祭壇よりいで大なるこゑをもて利鎌をもてるものにいひけるは地のぶどうをきりとれ熟したりぬるかの利鎌をいれて葡萄の球をこうあつめよ十九天のつかひそれ鎌を地にいれ地のぶ

だうをきりとりあつめて神の怒に投るゐ醡になげいれたり二十城のそとにてこのさかづきを踐しに血さかづきよりいでて馬の轡にとどくること七十五里にわたるべし

第十五章

また大きにして且あやしきものなる異象の天にあらはれたるを見たり七人にて天のつかひ末後にあつかひ災殃をもてり神のいかりこれにて盡るなり二また火のまじりたる玻璃のうみにごときものをみたり。このうみにそれをもてる獸とそれ像およびそれ名のかずとこのうみにたちたるその神に琴をとりて此ガラスのうみの海にたちたるを見たり三この人たち神の右

えゞ モーセのうたと羔のうたをうたひていひけるは主ぜんぜうの神なんぢの行爲いなるこの奇なるうたは万民の王よなんぢはみちいの義なるうたは誠なるうたは主よたれか爾をおそれざらんや誰かなんぢの名をあがめざらんや唯なんぢ聖ばんらくの民なんぢはまへにきたりて拜せん。なんぢのたゞしき行爲はすでにあらはれたり○五この後ち我みゝに天にて證のまくやはは殿ひらけたり六七のつぎまひをもてる七のてんは使きよくして光ある布をき胸にきんの帶をつゝのれり此みやより出たりつの活物の一この七人はてんのつゝひにて世々とこしへに生ける神の怒

をのまるきんは金椀をあたふ八神のさこの榮と權力よりいづるけぶり殿にみちたり。なんぢは天のつゝひはそなるに七のつぎつひはそなるまでは殿にいることをうるものなし

第十六章

つゝまた殿より大なるこゑいでゝ七のてんは使にこのたるをきけり曰ゆきて神の怒をそれる七のうるまりを地にこのたるもけよ二第一のつゝひ往てそはこのるまりを地にこのたるもけよ三第二のつゝひそは金まきもけゝまぐ獸の名なる人とそは像をはいまる人とにあしきうつ苦痛の腫物いでたり三第二のつゝひそは金椀をうみにこのたるもけゝまぐ海はなるものゝ血はごとく

ありて海にある生物みなしにり四だいさんの使それこの
るまりを河および水のみなもとに傾けまべそれ水になる
うそりて血となるまり五つを水をつくりどる天の使のりく
るこをきけり曰いまは在りし在きよき主よるんぢ斯の
ごとく審判をそなしたまふにより義なり六るんぢ聖徒と
よげんおやの血をあがしこのまりに血をあたへくのまし
む彼儕へこれを受べきそれなり七つを又こゑありて祭壇
よりいづるをきけり曰主なるぜんのうは神よるん
ぢはさばきへ正しき義なり八第四のつかひそれるまり
を大陽のうへにこのむけまべたいやう火をもて人をやく

の權をなたへられたり九ひとしく大熱にやけまて
災をつくりどりたまふ神の名をのしり且くんあらためも
神にさいをきせざりき十第五のつかひそれくるまり
をけものの座のうへにこのむけまべその國くらくなり
人くるくるしみにりてそれ舌をこのみたり十一又それくる
しみとおのれとの故によりて天のこのみを罵れのが行を
くいあらためざりき十二第六の使そのこのまりを大河ユフラテ
にこのむけまべそれ水のまりきたり是ひがしの諸王の
路をそなへんためなり十三つを又たりの口とけものの口と
ち及いつりの預言者のくちより蛙のごとき三のけがを

なる靈のいづるをみたり 十四 また惡魔のまいりて
なる事をおくるひて全地の君たちを就うまうをして全
能の神此おほいなる日のたゝかひよあつまるべし 十五 視
よ見盜のごとくしてきたらん裸程まくあるき羞處を
みること なからんためよ目をさまし衣をつけをるを
のい福なり 十六 この三此きい諸王たちをヘブルの音にハ
ルマゲドンとよぶ所によりあつめたり 十七 第七のつゝひそこにる
まりを空中へこのたゝけまべ大なる天の殿此ちる
る實座よりいでいひけるいまぞよ成り 十八 こゝ此時おほく
の聲いかづち閃電また大なる地震ありき人の地よりぞ

より以來このくのごとき大なる地震ありたることなし 十九 大な
る邑みつにわり異邦のもろくの城たゝまなり神おほいな
るバビロンを憶いでてこれにこの已のもげしき怒の酒をを
うたる杯をあたへたまへり 二十 もろくの島はにげさりもろ
くの山はみえなくなりぬ 二十一 また大なる雹てんより人々の
うへにふりぬ雹ごとに重おほよそ一タラントあり人々へ
うの災によりて神をのゝしりぬ。そは此ぬぎさひ甚しくれ
はしなりぬ

第十七章

なをつ此金椀をもてる七人の天此つかひのそこ一
人きたりて我にこのたりていひけるは來なんぢに多の水

のうへにざせる大淫婦の刑罰をしめさんに地の王たちこれと淫をおこなひ地にすめるそもの其いんらんの酒に名ひたるものに靈にうんじたらさんらきて野にゆき絳色のけものにのれる婦をみたり。これ獸あまねくこうだに僭妄の名あり又なつれ首と十のつれあり四この婦むらさきと緋にころもをまとひ金と寶石と眞珠をもて身をこのぎり手ににくむべきとれ及れのが奸婬のけがれとりまる金の杯をもちその額に名をかるせり。いはく奥義れいるバビロン地の淫婦と憎むべき者とれ母六我このなんるれ聖徒の血にるひ耶穌のあるを者どものちに醉たるを

みたり我このなんるれ見てれいに駭あやしみたり。天の使なんたいひけるにんぢ何故れどるや我なんぢにこのなんる及こととのまる七のこのうち十れ角あるけものの奥義をこのたうんへ爾がみるけものは獸いまきまへあるしが今はるこそきたるべき坑よりのぼりて滅にゆくん世のはじめより生命の冊にそれ名をかるきざまざる地にまめるものの前にあり今あるまだいづる獸をこくれどろこんこそに智慧の心あるべし此なつの首はれんあれざまる七の山なり十なつれ王ありそれ五はまだでに一はあれあ餘の一はいまだきたらんで來べちぞくそきまん土前にあり

て今あらざる獸ハ第八なり卽ち十つの王よりいでゝものを
ゑて終ゑはろびゑゆゝん十二爾が〻十ゝ十ゝつのゝ十ゝ王ゑ
りこのまゝゝハいまだ國をえざれども此獸と共もゑ一時の
あひだ王のごとき權威をとるべゝ十三このまゝゝハみな同心ゑ
ておのが能力と權威をゑたけものゑ予古このれゝ羔とたゝ
こゝん而して此ひつゝこゝまゝゝ勝なりそゝ羔ハゝゝゝの主。
の主ゝゝの王こゝまゝと共ゑあるゑものゝこゝる召れえゝゝたゝ
る忠信ゝゝのゝゝゝゝる主天のつゝひ又ゝまゝゝいふ淫婦
のざまるゝゝゝゝゝ爾が〻水ハゝゝゝん群衆ゝゝこゝく
諸音なり十六なんぢが見しゝゝゝゝ角とけものゝ夫いんぷを

憾ゝまゝをして荒墟のつ裸裎ゑなりゝむ又それ肉をくゝひ
火をもてゝられを焚べゝ十七そゝゝのまゝゝゑ神おのゝ旨ゑゝたた
ゝふの心をあゝゝ彼儕をしてこゝゝゝを同うせしめ且ゝみの
言ゝこゝゝく成まゝそれ國をけものゝゝあたゝゝめなまゝゝ
べなり十八なんぢが見しゝなんゑゝ地のゝゝゑゝゝ王なる
おゝいなる城邑なり

第十八章

このゝち我ゝゝ一人のてんゝゝつゝゝゝ大なる權威
をゝちて天よりくゝだるをゝる其きくゝゝ地をてゝゝ輝け
ゝ二このゝ大なるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ言けるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝバ
ビロン倒れたりたれり今あくまの住處まゝゝ各樣のけゝ

れたる靈および穢たるにくむべき鳥の巣となるべし 三 そは
万國の民のみなが奸婬によりて干るいのうれは酒をのみ地の
諸王のまと淫をおこなひ地の商賈のみなはるそづしき奢
華によりて富をいたせばなり 四 また天より聲ある
をきけり曰ふ民よなんぢらこの罪にともなはるな
又このまれ災にともなはるを免まんがため其中をいで
べし 五 それこのまづ罪いつもりて天にいたり神その不義を
こころに記たまへり 六 このまづなんぢらに爲しごとく彼に
なし其わざるひをもてしべし倍しそまたまに報このまづ斟なれ
べし杯になんぢら亦ぞいてられに斟あたへよ 七 彼がみ

づから尊大みづからを誉るごとく亦くるしみ悲哀をこれに
あたへよ彼こころのうちに曰ふまへ女王のくらゐに坐を
なれい寡婦にあらざ我このなんぢ悲哀にあらじとへられ故
にこの日のうちにこれの身にきたらん即
ち死うるしみ饑饑なり彼まさに火にやきつくさるべし
彼をさばきたまふ主たる神い能力あるものなるまばなり 九
これと婬をおこなひ彼とともにおごりくらしし地の諸王
このまづやうろこ烟をみてなげかれが爲になげきこのなるまん
十 これ諸王このまづうくる痛苦をおそれ遥にたちて
いそん哀このる哀の大なるまちバビロン堅固なる邑なん

ぢごうくる刑罰ひとくきの中よりいたりまりと土地の商賈こ
まぶなめよ哭こうるしめり。そのこのまちの貨物をこのふ人うけ
れぐるり十二其あきるひそのい金銀寶石眞珠細麻布むらさ
きとそめしそのの絹緋よそめしめ物さまざまの香木象牙さま
ざまの器皿あかひたくのき木ならひい眞鍮あるひい鐵あるひ
い臘石よてつくまる各様のうついそのの十三またの肉桂香料に
はひあぶろ没藥乳香ぶどう酒あぶら麥粉むぎ牛羊馬車奴
隷およびの人の魂より十四バビロンうんぢが心たしめる果穀
はみのりどき既よまぎさり凡のたぐれる華美はものもそ
よはろぶ復こまをうざるべしし十五ちまろの物をあきるひ

バビロンのためよ富をいたしし者どもバビロンの受るくる
しこを畏はるこのよはるのよ立てるきこのるしこりひはるへ十六
哀こうる哀こうる細麻布と紫とそ染しもれと緋よそめしの
のとをまらひ金ちり甚き眞珠よそこのぎりたる大なる城邑
よこのくれごとき大なる富ひときれ中ときこうぜんと
い十七またくの舟長うこを舵るひとぐたよび舟子と海よよ
りて生業をうをもれバビロンのそゆるけぶりを見はるこよ
はるまたて喊叫しひはるへ何のまちろ此ほひるる邑
よるこぶけんや十八またを塵を首のうへよまきちこ泣の
るこみてさけびひはるへこのるこ哉こうるこ哉これ

おろかいなる邑それおごりよりてまべく海に舟をそなへ
その富をえたる此まち一時のうちにほろびしこと天
より聖徒使徒預言者よ汝ら喜ぶべし神汝らの
のためにこれを報をなせたまへるなり三一人のつよき天
使つゐひ磨のごとき巨なる石をとりこれを海に投げい
ひけるはかくのごとく城バビロンこのごとく猛然うちた
ふされまた再あらはるることなかるべしらん三バビロンよ汝ぢ
らのうちに琴をひき樂をそうし笛をふきラッパをふく
者聲のさわぐきこえざるべし。そは汝ぢの中にあきう
の音のさわぐ聞ゑず三燈はひかりの重くてこれを磨
どの工人のきわぐこえざるべし。そは汝ぢの中にあきう
の魔術にまどはされたれば汝ぢ三日よげんじや聖徒および
びもろもろの地にありて殺されたるものの血のこれ邑にみえ
たり

第十九章

この後ちわれかくの人のおほきなる
群衆の天にあるをきけり曰ハレルヤ救と榮と權力はこれらの
神のなりたまふところなり二其さばきは眞にこの義なり。
そは神は淫亂をもてこの世界をけがしたる大淫婦をさば
き己がもろもろの血をもつてこれを罰したまへ

び、三 このまゝ再ハレルヤといへり。淫婦をやく火のけぶ
りのぼりて世々やむときなし。四 二十四人の長老および四
の活物ひれふして坐したまふところの神をふしをがみてア
ーメン。ハレルヤ。といへり。五 こゝろの寶座よりいでゝいふ神の
ちからよ神をおそれまつれよ大と小とのつかひびとなく皆ま
ことの神を讃美まつれ。六 我おほくの人々こゑのごとく多
のみづ々音のごとく大なるいかづちのこゑのごとき聲を
きけり曰ハレルヤそれ主なるぜんのうの神ハ王なり七 ま
ことに欣喜たのしみて神をあがめん。そはこひつじの婚姻の
とき既にいたりそれ婦まことみづからを備へたり。

たまへり。八 婦きよくしてかつ光あるほそき布をきることを
ゆるさる。此ほそきぬのハ聖徒の義なり。九 天の使われにい
ひけるハ羔のこんいんの筵にまねかるゝものハ福なり
とこのきたりたまへり。又われにいふこれ神の眞のことばなり。十
我その足下にひれふして拜せんとしたりしに彼われにいふ
然なすべからず。慎よ。汝も爾とおなじく僕なり。亦ハ此
の證をたもつなんぢの兄弟とおなじくおのれをもつものなり。なん
ぢら神をはいせよ。耶蘇の證をたもつる靈とよげんの靈
とをなすなり。十一 土 つゝまれたる天のひらけたるをみ
て一匹の白馬ありこれにのりたるものを忠信まことと誠實とまたる

へくる。このまん義をそなへ審判となるべうひをうせり十二それ目
いほのかれごとくそれ首いかるくの晃をこのむまり又ある
せる名ありこれの外にこまをあるるれる十三このを血に
あるみなる衣をまとへり。これの名い神のことばといふ十四天
になる諸軍あるくこのぶやけるるそき布をき白馬にのりて
こまをにあるべり十五主このまれ口より利剣いづ。こまをそそ列
國のなるを撃うつ鐵のつるをもてくにぐの民をつうさど
らん彼また全能の神れはるまぶしき怒のさうぶねを踐去
このまぶこうもと股にあるせる名あり曰あるよるの王あよ
あゆの主にまた一人れてんのつるひれ日のうるに立

るをこうれり。このを空中にとぶ鳥にかるいるる聲にくよびい
ひけるるんるんぢら神のかるいるる筵にあつまきうり十六
諸王のにく將軍のにく勇士のにく馬とこまにに乘るものの
肉およびに自主ぎまん大と小とれるるちるくべその人
のにくをくらへ十七我これけものの地の諸王およびその軍
隊のまでにあつまりて白馬にのれる者およびそれ軍隊
とたづのまんとまるをみれり十八獸というまりの預言者と
まりに擒にせるる。これ偽のよびげんぢやい前にけれしま
へるるうしぎるる事をかるるひけるの印誌をうけるる
者およびそれ像をそいまるそれをまどんしい者るり。こ

のみならずその生まれつき硫磺をもゆる火の池にまげいまされ三それ餘のものは白馬にのりたるそれの口よりいづるところの剣をもてころさまたり。そらくの鳥このもろもろの肉をくらひて飽りぬ

第二十章

一 一人の天使つひ底なきあるの鑰とおもいなる鏈を手にながさんとて天よりくだるをみたり二この惡魔と龍なるサタンと老蛇をとらへてこれを千年の間おさりおうんとそこなきあるき坑にまげいれ閉ぢめてそれうへに封をなし千年をすぎるまで諸國の民をまどわすことなきためなり。それ後このうちに暫時のあひだ釋はなるべし 四 我おもくの座位をみしにそれうへに坐するものあり。このものさばきの權をあたへらるまた耶蘇のあかしのゆえに神のことばのゆえに首きられたるものの魂をみたり。これまたけものとそれ像をおがまずその額あるひは手にうけざりしものとそれ生きかへりて千年のあひだ王となりぬ五それ余の死人は千年をすぎるまでよみがへらざるなり是だい一のよみがへりなり六これ第一のよみがへりにあづかるそれいさいはひなり是きよきものなり此とものがれうへに第二の死は權をもつことなかるべし。のもろもろは神とキリストとの

祭司となりキリストと共に千年王なるべし
○七 千年をへてサタンそれ囚より出でんとき地の四方なる列邦ゴグとマゴグをまどわし
これを集めて戦にのぞむこの人々の数は海の沙のごとし九 この人々地の上にあがりて聖徒の陣営と
愛せられたる城とを囲む此時に火天より降りてこれを焼つくせり十 この人々を惑せしあくま火と
硫黄の池に投げいれられたり即ちけものと及いつわりの
預言者のをる所なり此にいたりて昼夜とこしへに
世々やむことなし○十一 また白き大なる寶座とこれに
ざせる者とをみる地と天とそれ前をのがれて再びとどまる所なきところを見たり十二 また死
たる者の大と小とのところに立てるを見たり書物ひらかれたり又ひとつの書ひらかれたり
これいのちの書なり死たる者はこれら書にしるされたるところのことにより其おこなひにしたがひて審判をうけたり十三 海それその中の死
人をいだせり死と陰府とそれその中の死人をいだせり。かれらおのおのそれ行ひにしたがひて審判をうけたり十四 死と陰府
とを火の池に投げいれたり是だい二の死なり十五 生命の書にしるされざるものはまた火の池に

投いまられたり

第九章 我あたらしき天とあたらしき地をみたり先たつんとさきの地はまぢまさうり海もまたなること

二 聖城なるあたらしきエルサレム備へたるのひて神のをとをいでゝ天よりくだるをみる其さまは新婦その新郎をむかへんためと修飾たるがごとし

三 我おほいなるこゑたる天よりいづるをきけり。いはく神のまくやは人と間にあり神ひとゝもにすみまた人このみの民となり神みづから人とともに在してそれ神となりたまふ

四 神この目のなみだをことごとく拭とるまた死あるなく悲哀なげき痛苦あることなく前事はすでにさりぬ

五 寶座にざまるそれ我はいひけるは見よ萬物を新にせんまたこゝにいひけるはみんちらをを書かるせ。そはこれらの信まことにくしして確實なり

六 彼またいひけるはなしたり我はアルパなりオメガなり始なり終なり渇者には無償にて生命のみづの源をそのものにゆるさん

七 勝をうるものはこれらのものを受くその業となるべきん我はその神となり彼は子となるべし

八 されど臆病なる信ぜざるそれ憎べきそれ人をころせるもの姦淫をおこなふその魔術をなすもの偶像をはいまるそれ及まべて謊

をいふ。そのん火と硫磺のそゆる池にて、それ報をうくべし。
是だいにの死なり。⑨ りやはそれ、そつのそぎ、そひれ盛
るそつの金椀をとりて、七人のてんれつそひの一人きた
りて、我に、このたりいひけるは、來そ、羔のつまなる
る新婦をみせん。我みそまて感ずてんの使にたがさへ
らまて、大なるたうき山にいたれり。此にそまて、大なる
まち聖エルサレム神のさとえをそて、神のりとをいだし
天よりくだるを示す。土それ城のひかり輝くことたとへ
き玉のごとくまきとある金剛石のごとし。土こまて、大なる
たうき垣ありて、十二門あり。其そんに十二のてんれ使を

れり。門のうへにそなをあるなり。イスラエルの十二のそのそ
の名なり。ひがしに三のそんあり。北にみつの門あり。南に
みつ。北そんあり。西にみつの門なり。十四まちのしがきに十
二の基址あり。其うへにひつじの十二使徒の名なり。主に
まこうなる者まちと門とのしがきとをはかりたんなあ
に金の竿をもちみなり。其まちの四方にてながさと闊と
おなじ。天の使きとをはかりて城をはかりしに六百里あり。長は
高さとなり。相ひとしき。十七 又それ石垣をはかりしに人の度
にあらずして、百四十四キユビトあり。人のはかりへ天のつ
かひ。此度とおなじ。大いしがきへ金剛石にて きたてき城へ

きよらかなる玻璃のごとき純金をもつくれり 十九 城のいし
ぐきの基址はさまざまの玉をもつくれり 第一のそこなるはこ
んごうせき 第二は青玉だん 三はあらきなる 第四は緑の玉
だん 五はくさるものの瑪瑙だん 六は黄色の玉だん 七はうす
き黄色なる玉だん 八は水いろの玉だん 九は紅のなる 第十
は翡翠だん 十一は深くさるものは玉だん 十二はむらさきは
玉なり 三十二のもんは十二は真珠なり 一のもんだゆまく
ひとつの門をつくれり。まちの衢はきよきるぎやもんの
ごとき ぎゆんきんなり 三 城のなかの殿あるをみる。そ
は主なる全能の神 および羔 みやなるべし なり 三 又ま

ちは日月のてらすことを需ず。そは神の榮光 こうきを
てらす 且 こひつじ 城のともしびなるべし なり 二四 よろづ
の國のたみこれ光によりてあゆまん 地の諸王 おのれをこれ榮
と尊貴とをそこれ城にきたらん 二五 それもんは終日とぢ
むることなし 夜あることなし 二六 よろづの民おのれをこれ榮となふ
ときとをもつて此まちにきたらん 二七 凡てきよからざるもの
と憎べきおこなひをするものの或はいつわりをいふものは
必ずこれにいることを えざる唯こひつじの生命にふでしるされ
たるもののみ入なり

第九二章 てんし使いのちの水にこの世を我にしめせり其みづ

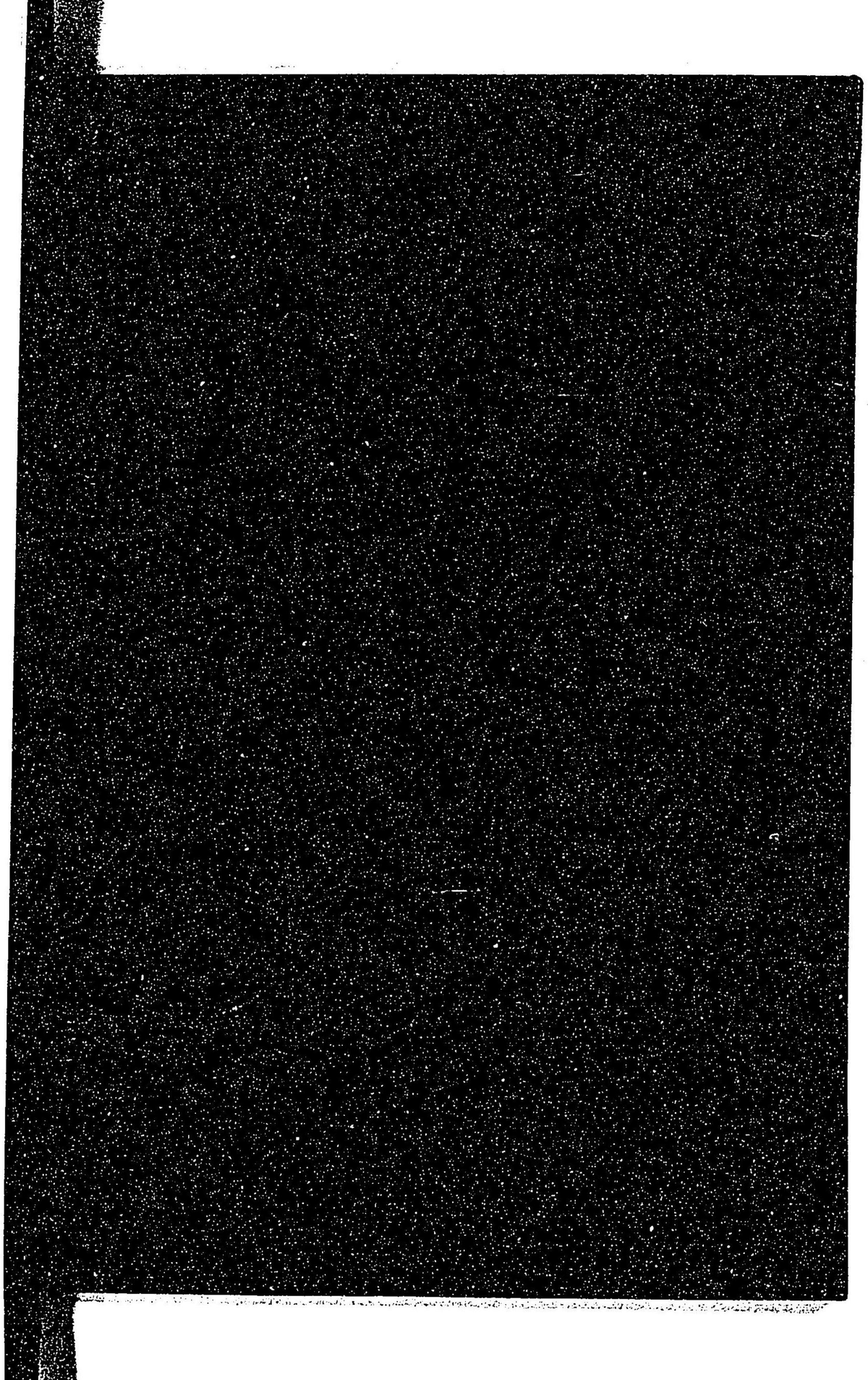
まきとりて水晶のごとく神とこひつぢの寶座よりい
づ二城のちまたの中をよびぬ河の左右にいのちの樹あり十
二種の果をむすび一種を月ごとにむすぶなり。その樹の葉
はよろづの國をたすけをいやすべし三このさわりて呪詛あることな
し神とこひつぢの寶座そこにはなりそこに僕こゝにつかへ
んぬしのもとにてども神のこのかをみるこのみの名をうれらの額にあるべし
五このことは夜あることなく燈のひかりと日のひかり
をもとめることなし。そこに主なる神このもろもろをてらしたまふ
なり彼儕はよろこのぢとなく王たらん六天のつかひ又
ものもとにいひけるこれ言はんをべくして誠實なり預言
者のたましひの神なる主もろもろやうに成んとまることを其
もろもべどもに示をなめにそは使をつかはせり七ときは速に
いたらん此ふみの預言のことばを守るものは福あり○八
ヨハネこれもろもろのことを見聞せり。ことをみきくせしとき
我はこれもろもろの事をもめせる天のつかひの足下にひれふして
拜せんとおもひけるに九彼はいふ然なべこのことをつし
めよ我はなんぢと同くおもべなり亦なんぢの兄弟なる預
言者およびこれ書のことばをまもる者とおなじく僕なり。
なんぢ神をはいせよ十この書又ものもとにいひけるな此ふ
みの預言のことばを封ずることなかれ。そは時ちかければ

なり 十二 不義なるものは汚穢なり聖きものは義なるものを義なるものは聖なり義なるものは義なるものを任よせよ 十三 速よりなんこのうらだ報應あり行ふところよりなげひてこゝにむくゆべし 十三 我はアルパなりオメガなり首先なり末後なり始なり終なり 十四 それ衣をあらひしものは福なり。このまろいのちの樹の果をうくることを得またもんより城よりいることをうべし 十五 犬および魔術をなすものそれ姦淫をおこなふものそれ人をころすものそれ偶像をはいする者またまことをべて謊をこのみて虚妄をおこなふものはいま城のそとにあるなり 十六 我イエスそれ耶穌なり使をつかはしてこの事をなんぢら諸教會にあかしをなす我はダビデの根またそれ苗裔なり我はかがやく曙の明星なり 十七 靈とまなよめと曰きたるべしと。これを聞るものもきたれといく渇するものはきたるべし願ふものは價なくしていのちの水をのむべし

十八 それ此ふみのよげんの言をきくものに証をなす若これふみの預言のことばにくくものあるもあれば神この書にかかるところの災をそこへくくはんそれこれ書のよげんの言をけづるものあれば神これをして此ふみにかかるところの生命のきの果と聖城とにあづからしむ 二十 これ事をあかしする者いひけるは我はかならずすぐ

速やかなるアーメン主いゑすきりすとへ　こわるを
そん主いゑすの恩寵をかうむりの聖徒とまのよりなんことを
必ず成べし　三方ちらず

新約聖書約翰默示録終



29
111
M